『物質と記憶』におけるベルクソンの哲学的心理学

河　津　邦　喜

序.

この論稿の企図は，フランスの哲学者アンリ・ベルクソンについて，その第二の主著である『物質と記憶』における彼の哲学的心理学の全体像を概観することにある。

彼の哲学は，科学的に計測可能な時間を批判して，それは知性によって空間化されてしまった時間であり，それ以前に「持続durée」という真の時間がある，と主張する。そして，この持続は，知性によっては掴みえず，むしろ直観によって到達するしかない。こうして，彼の哲学は，知性＝空間化された世界と，直観＝持続する世界との対立という，二元論として捕らえられることが一般である。しかし，彼のテクストは決してこの二元論に満足していない。逆にそれは，実在がいくつもの次元に区別され，その各次元において持続と空間性は，異なるあり方で現れることを，表現している。これまでの研究者，例えば，ジョルジュ・ムレロはそれを「実在性の諸段階」と呼んだし(1)，ピエール・トゥロティニョンはベルクソンにおいて存在の五つの段階を区別した(2)。だが，彼らの区別は，余りにも思弁的な関心のうちにあるため，我々の生活上の具体的経験においてその区別がいかなることを教えるか，という問題に答えられない。

そこで以下において，人間の心理学的経験を精密に分析し体系化した『物質と記憶』の諸理論が，我々の経験に対して何を教えるかという観点から，それを読み解いていくことにしたい。

1.『意識の直接与件に関する試論』の不十分さ

i）ベルクソンの最初の主著である『意識の直接与件に関する試論』（以下『試

論』と略記する）第2章は，「数える」ことの分析を通じて，数の表象という表象空間（「数的多様性」）以前に，諸々の印象の有機化・相互浸透（「質的多様性」）を見出す（D. I., p.95)。しかしまた，以前の研究において我々が既に指摘したように[3]，この有機化以前に，諸々の印象ないし刺激の相互外在的状態という根源的空間の次元が垣間見られている。この三つの段階は，物的実在から出発して，身体において心理的実在が構成されていくプロセスを示している。例えば，「遠くの鐘の継起的な音を数える」場合，

「先ず，私はこれらの継起的な感覚の一つ一つを保持して他の感覚とともに有機化し，既に知っている歌の節やリズムを思い出させる音のグループを形成する。その場合には，私は音を数えず，音の全体の数が私に与えた言わば質的な印象を取りまとめるに留まる。あるいはまた，私はそれらの感覚を数えようという気持ちをはっきりと持つ場合がある。その場合には，私はそれらの感覚をどうしても分離しなくてはならないだろうし，またこのような分離は或る等質の環境の中で行われねばならず，そこでは各音は，その質を奪われて，いわば空虚にされ，それが通過した，同一の痕跡を残すことになるだろう」(pp.64-65)。

音が我々の意識の場にとどく以前に，各音は時間的にも空間的にも相互外在的状態にある。この物的な状態の特徴は，時間の各瞬間が互いに依存せず，或る瞬間が現れるとき，その直前の瞬間は消えてしまうこと。記憶がないことである。「一瞬の時間が保存されて他の瞬間に加わるということはあり得ないはずだ」(p. 65)。実在のこの第一の段階は，「瞬間的精神」のそれである。さて，それらの音が身体を横断しようとする際，何が起こるのか？それらの音は時間的に留め置かれ，次の瞬間に付け加えられ，「有機化」されて，「質的多様性」という「持続」を構成する。それは一個の感覚表象をなす。ここで，次の二つのことに注意しなくてはならない。

①この第二の段階において，有機化するのは我々という意識主体ではなく身体であり，意識そのものが身体のこの働きによって生じること。あるいは，我々はこの感覚を「持つ」のではなく，我々はこの感覚「である」こと。もし，総合について語るとしても，この有機化は意思的でない受動的総合である。そして，反省ないし知性の意思的な能動的総合は，受動的に総合されて生じた持続を，事後

的に「或る等質な環境」(ベルクソンはこれを「補助的な空間」とも呼んでいる〔p.81〕)へ分割・並置し，第三の段階を構成するにすぎない。

②可感的質がこの有機化によって構成されること。成程，『試論』においては，各音の質は与件であり，複数の音の全体的質だけが構成される。しかし，『物質と記憶』では，各音の質そのものが時間的な収縮によって構成される。後者の著作では，第一の段階である物的実在は，「イマージュ image」の世界と呼ばれ，非常に弱い諸性質を持つ振動の体系だ，とされている。「例えば，認知される二つの色の還元不可能性は，とくに緊縮された持続からくるのであって，我々の諸瞬間の一つのなかでそれらの果たす無数の振動が，そこには凝縮されている」(M. M., pp.227-228)。

ii）さて，実在のこの三つの段階において，我々が慣れ親しんでいるのは，「表象空間」という第三の次元だけである。それは決して，一義的に表層的意識を指し示すのではなく，なにより先ず，我々の日常的な生活世界を指し示すはずである。なぜなら，『試論』によればこの世界には，既に知性の空間化の働きが深く浸透しているからだ（D. I., vii, pp.102-103)。それに対して，我々にはむしろ隠されている第二の段階は，『試論』ではまだ，内的意識だけを指し示している。その代わり，知性の働き以前の段階が，具体的経験において見出される。『試論』はその多くの例を挙げる。それらの例は大きく見て，次の三つに分類できる。

①音のメロディなどの外的感覚が質的全体をなす場合（p.64)。または，運動体への切り分けやその空間的位置づけ以前に，運動が質的変化として知覚される場合。「一点から他の点への移行としての運動は，精神的総合であり，心的過程であり，従って拡がりをもたない」(p.82)。②不可分な内的感情（p.6)。あるいは，単なる量的増大へ結晶化される以前の，内的感情の質的変化（p.7)。③連合主義心理学がその内的・全体的ニュアンスを取り去って諸観念の連合に分割する以前の，諸観念あるいは記憶の相互浸透状態（p.100)。「自由な決意は心全体から発する。行為は，それが結びつく動的系列が基本的自我と同化する傾向を増せば増すほど，それだけ一層自由となるであろう」(pp.125-126)。

このどの例においても，能動的総合の本質である分割と固定化，それ以前の心

的状態つまり「純粋持続」を，我々は内観によって具体的に経験できる。これらの持続はすべて，「有機化」という第二の段階に属しており，そこでは，すべてが相互に浸透し，不可分な全体が固有の質を帯びるが，また，連続的・質的な変化が絶えず生じており，動的な統一性を成している。このような持続は，時間の本源的あり方を示すように思われよう。

しかし，この三種類の持続が，我々の生活のなかでどのように位置づけられるのか，『試論』では，まだ説明されていない。「持続」として大きく括られているものの，この三つは心理生活において異なる実在性の段階をなし，異なる時間性を孕むのではないだろうか？そしてまた，この三つが先述の実在の第一の段階といかに関わるのか，『試論』では，まだ明らかでない。例えば，『試論』では，夢について次のように語られる。

「持続についての我々の日常の考えが純粋意識の領域内へ空間が次第に侵入してくることに左右されていることをはっきり示す事実は，自我から等質的時間を知覚する能力を取り去るためには，自我が自己の調整機構として利用している心的事象の比較的表面的なあの層を，自我から取り去るだけで事足りる，ということである。夢はまさに，我々をこの状態に置く。なぜなら眠りは，身体器官の機能を緩めることで，特に自我と外的事物との間の交流面を変容させるからである」(p.94)。

だが，この「交流面の変容」によっていかなる世界が我々の前に開けてくるのか，それは「純粋持続」なのかどうか，定かでない。また，『試論』は，我々の日常的生活を可能ならしめる知性と「表象空間」の次元に位置するところの「表層の自我」と，内的な純粋意識である「深層の自我」との，二元論に留まる傾向がある。「結局，二つの自我があることにより，その一方の自我は他方の外的投影のようなもの，その空間的で言わば社会的な代理物であろう」(p.173)。その限りでベルクソンの理論は，サルトルが批判するように，知性と表象空間という客観的世界から退却して，持続という心理的・内的状態のなかで夢想に陥ることを正当化するものでしかないことになろう[(4)]。

だが，次の『物質と記憶』は，それらの問題に対して明解な解答を与えている。以下でそのことを見ていこう。

2.『物質と記憶』第1章の知覚論

i）『試論』が，外界と接触する硬張った意識表層から，内的で流動的な深層へ溯行しようとしたのに対して，『物質と記憶』は，初めから我々を物的世界のただ中に置く。しかし，それは，既に科学的世界像や知性に浸された我々が，日常慣れ親しんでいる客観的世界ではない。

さて，ベルクソンから大きな影響を受けたメルロ・ポンティの『知覚の現象学』も，定立的意識が対象化する客観的世界から，非措定的・身体的意識がそれと交流する「生きられる世界」へと溯行する。

「我々はもはや，知覚とは端緒における科学だとは言わないで，逆に，古典的科学とは己れの起源を忘れて自らを完結したものと思い込んでいる知覚のことだと言おう。したがって，最初の哲学的行為は，客観的世界の手前にある生きられる世界にまで立ち戻ることになろう」(P.P.,p.69)。

しかし，彼は，自らが「現象野」と呼ぶこの世界を，直ちに，ベルクソンの「純粋持続」から区別する。

「こうした現象野とは，一つの＜内面的世界＞のことではないし，＜現象＞とは一つの＜意識状態＞，ないしは一つの＜心的事実＞などではなく，また諸現象の経験も，一つの内観またはベルクソン的意味での一つの直観なのではない」(p.70)。「＜意義の直接与件＞への還帰が，望みのない作業になるのは，哲学者のまなざしが原理的に自分では見ることのできない対象に自らなろうとするからだ。この場合の困難は，…中略…内面性というものは，原理的に一切の表現の試みから逃れてしまうからである」(p.70)。

成程，『試論』が孕む，内的意識の観想へ引き籠もる傾向に対しては，この批判は有効かもしれない。しかし，『物質と記憶』には，この批判はもはや有効ではない。それどころか，そこにおいてベルクソンは，メルロ・ポンティの「現象野」さえをも越えて，それ以前の次元へ溯行しようとする。なぜなら，メルロ・ポンティの「現象野」とは，例えば，次のようなものだからだ。

「子供とって蝋燭の光は，火傷した後でそれが彼の手を惹きつけなくなり，文字通り嫌なものとなったときには，様相を変えてしまう。視覚は既に一つの意味によって住まわれており，この意味が視覚に対して，世界の光景のなかでも我々

の実存のなかでも一つの役割を与えているのである」(p.64)。メルロ・ポンティにとって，感覚は，世界と我々の身体との対話の所産であり，「文字通り，コミュニオンに他ならない」(p.246)。

しかし，『物質と記憶』が溯行する実在の第一段階つまり物的次元は，そのような対話以前にある。なぜなら，たとえ，メルロ・ポンティの扱う感覚が無記名な身体的次元に位置するによ（「どんな知覚も一般性の雰囲気のなかで生じ，無記名なものとして我々に与えられる。…中略…ひとが私のなかで知覚するのであって，私が知覚するのではない」p.249)，彼の「現象野」という知覚世界は，一つの身体的実存という恒常的中心によって常に既に有機化され，絶えず強力に中心化されている。それに対して，ベルクソンが「イマージュ」の宇宙と呼ぶ物的次元は，いまだにどんな身体にも関連づけられていない諸性質の流れ（＝「振動」)，脱中心化された世界であるからだ。

「イマージュは知覚されないでも，存在することができ，表象されなくても，現前することができる」(M.M.,p.32)。「私はイマージュの総体を物質と呼び，その同じイマージュが特定のイマージュすなわち私の身体の可能な行動に関係づけられた場合には，これを物質の知覚と呼ぶのである」(p.17)。

こうして，二つの体系があることになる。「ここには宇宙についての私の知覚と呼ぶイマージュの体系があって，或る特権的なイマージュつまり私の身体がわずかに変化すると，その全部がすっかり変転する。このイマージュが中心を占め，他の全てのイマージュはそれに従って規定される」，「他方また，同じイマージュでありながら，各々がそれ自身に関係づけられる場合がある。それらは成程相互に影響しているけれども，結果がどこまでも原因と比例しているような仕方で相互に影響するのだ」(p.20)。

後者の物的な体系は，実在そのものであるが，科学が対象化する客観的世界ではない。『創造的進化』で示される通り，時間を消去する科学のカテゴリーは，物質流の中に島のように浮かぶ比較的閉じた系である物体においてしか，有効でない[(5)]。しかも，「より一般的に言うならば，孤立した物質的対象を仮構することは，一種の背理を含むのではないか。この対象は，その物理的諸特性を他の全ての対象と結ぶ諸関係に負い，その諸規定の各々，したがってその存在すらも，

宇宙全体のなかでそれが占めている位置に負うているからである」(pp.19-20)。一つの物的イマージュについて語るとき，それをアトムのようなものとして考えることを避けなければならない。なぜなら，物的イマージュとは，「無際限な宇宙に波及する諸変化があらゆる方向に走るための通路に過ぎない」からだ (p.33)。この物的イマージュは，それだけで既に意識であるが，「権利上の」意識に過ぎない (p.38)。そのわけは，あらゆる側面においてあらゆる他のイマージュから作用を受け，それを直ちにそのまま全ての他のイマージュへ反作用を返しているからである (p.33)。

それでは，物的イマージュを身体へ関連づける事，事実上の意識への移行，中心化，または，知覚体系への移行は，いかになされるのか？

①あらゆるイマージュからの流れが生物身体を横断する際，その身体の「不確定性の地帯」(p.36) において，その作用が直ちに反作用へ移行することをやめ，作用と反作用との間に或る隙間ができる (pp.26-27, p.55)。それによって，動物は，受け止めた作用のうち或るものだけを留め置いて，それ以外のものは素通りさせることができる。他から分離され，留め置かれた作用は，それだけで，事実上の意識へ移行する (p.33)。

②この隙間によって，動物は，返すべき可能な反作用の間で「躊躇する」ことができ (p.28)，反作用を直ちに返す代わりに，「単に生まれかけの」(p.26) ものとして，それを留め置くことができる。

③留め置かれた作用と反作用とは，互いに組み合わされ，一つの閉じた体系を成すことができ，それによって物的世界をなすイマージュは，身体を中心にして内へ折りまげられ，或る知覚世界を形成する。「我々の知覚は，イマージュの実体からそのまま切り取られたその部分であり，我々の身体への対象の潜在的作用や，対象に対する我々の身体の潜在的作用を表現しつつ，我々の関心を呼ぶ側面を全体的対象から切り離すに留まる」(p.59)。

ここで注意すべきことだが，この次元では，あらゆる動物に，アメーバさえもに (p.177)，知覚が認められることになる。そのことは，ベルクソンが知覚を考える際に，メルロ・ポンティでさえも完全には捨て切れなかった暗黙の公準を放棄したことを示している。それは，「あらゆる知覚は全く思弁的な関心を持って

いる」(p.24) という要請である。この公準に従うなら，知覚は，対象認識，あるいは少なくとも意味の了解，という枠内で考えられるに留まる。そのため知覚は，(メルロ・ポンティが知覚と行動との密接な関係をいかに強調しようとも) 権利上は行動から独立しているものとして，捕らえられてしまう。その場合は，アメーバには知覚はないことになろう。逆に，ベルクソンは，知覚と行動が分化する以前に，身体が受け止める作用と返す反作用との間の移行の不確定性を認める。この不確定性があるところには，すでに未分化な知覚－行動があることになろう。これは知覚を，＜意味の了解＞以前に，＜諸力の関係の特殊なあり様＞として見ることであり，この新しい公準によってこそベルクソンは，メルロ・ポンティが少なくとも『知覚の現象学』において留まった，＜意味の世界＞の彼方の次元へ溯行したのである。

ii）さて，人間においては，脳髄の神経組織の爆発的な複雑化のために，隙間は巨大化する。知覚と行動とは，他の動物よりはるかに大きく分化してしまう。人間の脳髄においては，「末端の刺激はそこであれこれの運動機構との間に，選択され，もはや強制されるのでない関係を結ぶ。他方で，脳髄の中では，おびただしい数の運動の通路が，末端から来た同一の興奮に対して，全部一緒に開かれることもできるので，この興奮は限り無く分散し，したがって，単に生まれかけの域を出ない無数の運動性反応の中に散逸する可能性も持っている」(p.26)。そして，この分化によって，人間は，知覚と行動との間にあるべき紐帯を，失ってしまう。二つの間の再統合は，探索行動の反復や教育によって獲得するしかない。ベルクソンは，そのことを，「我々の感官は教育を必要とする」(p.47) という仕方で，表現している。

「視覚にしても触覚にしても，その印象を初めから局在化するわけにはいかない。一連の照合や帰納が必要であって，我々はそれらを通じ，自分のいくつかの印象を少しずつ互いに配列してゆくわけである。ここからして人は，感覚というものは，本質上拡がりをもたないので，並置されるから延長を構成するのだろうと早合点する。…中略…私の様々な感官が与える同一対象の様々な知覚が集まっても，対象の完全なイマージュを構成することにはなるまい。それらは，いわば

私の諸欲求の隙間のそれぞれに応ずる間隔を隔てて，お互いに離れたままであろう。感官の教育が必要なのは，この間隔を補填するためだ。この教育の目的は，私の感官を互いに調和させ，私の身体の欲求の非連続性そのものによって破られた連続を，その所与の間に回復することであり，つまりは物質的対象の全体を，近似的に再構成することである」(pp.47-48)。

人間においては，身体が受け止める作用と，返す反作用とが，生得的本能によって規則づけられていない。また，諸感官同士が互いに関連づけられておらず，その再統合のためには，先ず，各知覚に対して或る行動を関連づけ，次に，それらの行動を相互に関連づけることで，諸感覚を一つの対象へ統合する必要がある。「感官の陶冶はまさしく，感覚的印象とそれを用いる運動との間に設けられる連結の総体から成り立っている」(p.102)。このことは逆に，その統合以前には，我々の知覚世界は身体によって中心化されていないことを示す。

「児童を研究した心理学者はよく知っているが，我々の表象は，最初は非人格的である。それが自分の身体を中心とするようになり，自分の表象となるのは，徐々に，帰納の力によってである。こうした操作の機構はまた，容易に理解される。私の身体が空間中を動くにつれて，他の全ての表象は変化するが，これに反して身体は，どこまでも変化することがない。だから私は当然これを中心とせざるをえず，他の全てのイマージュをそれに関連づけるであろう」(p.45)。

このような統合を行うのは，ベルクソンが「運動機構mécanisme moteur」・「運動的記憶力」と呼ぶ，身体運動の習慣的力である。これは，身体の不確定性の地帯における隙間が「潜在化」させた反作用に他ならない。この力は，身体が受け止め孤立させ留めておいた外からの作用と関係し合う。そのため，「私の身体を取り巻く諸対象は，それらに対する私の身体の可能な行動を反映する」(p.16) ことになる。「その場合，我々にとって全ては，あたかも諸々の表面から発する光，絶えず拡散する場合は決して現れることのない光を，我々が表面へと反射しているかのようであろう」(pp.33-34)。こうして，「運動機構」は，(a)諸感覚を或る物体へ＜統合＞するとともに，(b)知覚体系を身体を基点に＜中心化＞するが，それは，(c)諸感覚を三次元的な延長世界に＜反射＞し，対象の位置する各場所へ＜局在化＞することによってである。

この<反射>や<局在化>以前には，拡がりのない内的意識があるわけではない。逆に，そこには，脱中心化され自由に浮遊するイマージュの体系がある。それは確かに「拡がりextension」をもつ[6]。それは，ただ，日常的世界のように比較的堅固に座標づけられてはいないにすぎない。そして，この次元で，或る身体へ局在化されていない我々は，この「拡がり」の至る所に遍在し拡散している。知覚そのものが，知覚される対象が位置するその場所で知覚される。「私の知覚は，純粋な状態では，…中略…先ず，諸物体の総体の中にあり，次いで徐々に自己を限定する」(p.62)。したがって，先の<反射>の機構は，知覚が知覚対象の位置するその場所で知覚されるための或る秘められた機構に押しかぶさり，我々の身体と対象とをはっきりと分化させることで，漠然とした「拡がり」に堅固な座標を押し当てるものである。

iii）さて我々は先の節で，実在の三つの段階に対応する，総合の三つの段階を見た。第一に，無数の瞬間を圧縮して感覚的質を構成する身体的次元での受動総合。第二に，それを土台に，いくつかの音を有機化し相互浸透させて質的多様性を構成する，身体－意識的な受動的総合。第三に，第二の段階で構成された質的多様性を土台にしつつこれを分解・固定・並置して表象空間を構成する，意識主体のなす能動的総合。

先の<統合>・<中心化>・<反射>・<局在化>の身体的メカニズムは，この第二の段階に位置している。総合の第一の段階では，諸感覚や諸行動は互いに統合されていない。第二の段階で初めて，それらの関連づけがなされる。この第二段階での総合は，意識主体がこれを遂行するのでなく，この主体そのものが，この総合によって構成される。なぜなら，『物質と記憶』において「人格personalité」とは，感覚－運動系の組織体系に他ならないからだ。「先ずイマージュの総体があり，この総体の中に『行動の中心』があって，利害関係のあるイマージュは，これにぶつかって反射するように見える。こうして知覚が生まれ，行動が準備される。…中略…私の人格とは，これらの行動をそこに帰すべき存在である」(p.46)。

総合のこの第二の段階は，メルロ・ポンティの『知覚の現象学』における「生

きられる世界」の次元に他ならない。メルロ・ポンティは，この段階での総合を非常に精緻に分析した。「身体を持つとは，我々が実際に知覚する世界の分節を越えて，全ての知覚的展開と全ての相互感覚的照応の基本型を所有することだ」(P.P.,p.377)。しかし，総合の第三段階にあたる「作用志向性intentionnalité d'acte」と区別して，第二段階に潜在的・身体的な「作動志向性intentionnalité opérante」を認め（p.490），第三段階での人称的主体と区別して，第二段階に無記名の身体的主体を置く（pp.513-514）などの彼の哲学的操作から分かるように，彼が意識の主体性を掘り崩すとき，それは，その身体的下層に，よりしなやかでより秘められた主体性を置くためであるに過ぎない(7)。また，『知覚の現象学』では，統合度の大小はあるにせよ，知覚世界は既に常に中心化されており（pp.394-395），極端な脱中心化は単なる病理的状態に過ぎない。「いわゆる知覚の底には，明白な作用を支えるためのより深い機能が存在し，もしそれがなければ，分裂病者の場合のように知覚された対象から実在性の指標が失われるだろう」(p.395)。最後に，意味の了解がそれ以上還元不可能なものとされ，発生状態での意味の彼方に，意味を持たない物的な状態を措定することは，再び科学的客観主義に舞い戻ることだ（pp.16-17），と彼は考えた。

これとは逆に，ベルクソンは，総合の第二段階を越えて，その彼方に物的なイマージュの世界を見出した。既に述べたように，ここでは科学のカテゴリーがまだ有効でないため，この溯行は科学への回帰ではない。また，この世界には意味はまだないが，広義の（権利上の）意識は既にある。なぜなら，ベルクソンにおいて意識とは，意味の了解ではなく，流れ方の不確定性であり，諸力の特殊な関係であるからだ。身体への作用と身体からの反作用が「隙間」によって分離した後に，互いに関連づけられるならば，そこで初めて意味の了解が生じるであろう。

3．『物質と記憶』第2章の記憶論

i）我々はここまで，『物質と記憶』の第1章を，次の指示に従って読み解いた。「我々がここまで取り扱っているのは純粋知覚perception pureであって，記憶力と結合した知覚ではない。では，記憶力のもたらすものを取り去って，知覚を生地のままの状態で考察しよう」(M.M.,p.42)。しかし，「我々が理解しているよ

うな知覚をいったん認めれば，必ず記憶力が姿を現すはずである」(p.41)。「もし記憶力，すなわち過去のイマージュの残存を仮定すれば，このイマージュは我々の現在の知覚に絶えず混入するであろうし，これにとって代わることすらありうるだろう」(p.68)。なぜなら，「知覚における我々の意識の役割は，記憶力の連続的な糸によって，我々よりはむしろ事物の一部をなすであろうような瞬間的観照の切れ目のない系列をつなぎ合わせることである」(p.67) からだ。我々の意識がこの役割を果たすことは，身体の不確定性から「ア・プリオリに演繹できる。なぜなら，たとえこれら身体の目標が刺激を受け取ってそこから予見できない反作用を仕上げることだとしても，反作用の選択は偶然的になされるべきでないからだ。この選択は疑いなく，過去の経験に鼓吹される」(ibid.)。記憶の存在も，やはり，不確定性ないし「隙間」をその条件とする。「記憶力は，こういうわけで，我々の意志の不確定性が認識の領域に引き起こす反響なのだ」(ibid.)。

我々は既に，「不確定性の地帯」は，身体が受け取る作用と返す反作用との「潜在化」を可能にすることを見た。これは既に諸瞬間の収縮である。この際注意しなくてはならないが，物的イマージュの収縮は，感覚だけでなく行動も可能にしているはずである。行動は身体の要素的運動を収縮し，広義の習慣を作ることで初めて成り立つからだ。それは，先の総合の第一段階に位置する。しかし，第二段階にも同じことが言える。身体の「運動は，筋肉の多くの収縮と緊張から構成されている…中略…反復や練習から生まれる進歩は，単に，初めから含まれていたものを取り出し，要素的な運動の各々に，…中略…あくまでも連携を保つようにすることを専ら本質としている」(p.122)。習慣は何より先ず，時間的収縮である。「先行する運動のなかで後続する運動があらかじめ形成される，それは部分が潜在的に全体を含むようなあらかじめの形成である」(p.102)。

ii）だが，ベルクソンが強い意味で記憶と言うとき，それは，身体的次元での収縮ないし習慣とは，本性上区別される。それは彼が「独立的な記憶」(p.82) と呼ぶ「記憶イマージュsouvenir-image」である。ここで我々は，『物質と記憶』第2章の領域に入る。この過去のイマージュは，知覚される対象への行動を身体に適切に行わせるために知覚に混入される。「外的知覚が我々の側にそのおおよ

その輪郭を描く運動を惹き起こすとすれば，我々の記憶力は受け取った知覚に，これと類似し，我々の運動が既に素描している古いイマージュを導く」(pp.110-111)。

例えば，未知の国語が話されるのを聞くとき，初め我々は「どの音も互いに似通っている混乱した雑音を知覚するだけだ。何も聞き分けられず，何一つ復唱することができない」(p.120)。しかし，繰り返しそれを聞くことで，「聴覚的印象は，聞き取った語句を分解したりその主要な分節を表示する力のある初発的運動を組織する…中略…内部に随伴するこの自動的運動は，初めは混乱し無秩序であっても，反復するにつれて次第にはっきりと分離してくるだろう…中略…こうして我々の意識のうちには，生まれかけの筋肉感覚という形で，聞き取られる言葉の運動的図式と呼べるものが進展する」(p.121)。このことは，絵を一目見てそれを描き直せる場合にもあてはまる。それが可能なのも，絵を見る際に既に，「最も普通の輪郭の組み立てを一目で見破る習慣，つまり一刷でその図式を描く運動傾向」(p.106) が既にその知覚を成り立たせていたからである。

だが，それだけではない。未知の国語を聞き取れるようになるにつれ，我々は，その意味を解釈する「諸観念の中に一気に身を置き，それらを聴覚的印象へと展開せねばならず，聴覚的印象は，運動的図式に自らはまり込むことで，知覚されたままのもとの音響に覆いかぶさるものであろう」(p.129)。そのため，我々は何か文章を走り読みするとき，実際には知覚されていない語句すら記憶の投影によって読み取ってしまう (p.113)。

こうして注意的あるいは反省的知覚は，「真に反射を予想している」(p.112)。この高次の反射は，もはや単に，感覚を運動と統合するだけでなく，そこに記憶を折り重ねて再統合する。「我々の判明な知覚は，まさしく閉じた円環にも比すべく，精神へ引き入られる知覚イマージュと，空間へ投げ出される記憶イマージュとが，互いに後続して走るのである」(p.113)。我々が既に見たように，「不確定性の地帯」ないし「隙間」はすでに，作用と反作用とを内側に折りたたみ，知覚世界という比較的閉じられた系を作っていた。しかし，記憶イマージュはこの折りたたみを発展させ，より閉じられた「円環」を作る。もはや我々は，次の行動へ，外的世界へ，未来へ，傾くことを止め，知覚対象のあれからこれへ飛び移る

ことを止めて，ただ一つの対象と，閉じたしかし濃密な関係を結ぶ。成程，我々はいつまでもこの円環に閉じこもらずに，外界へと働きかけ現実に行動することで，この円環を破るだろう。このことは，「注意は，現在の知覚の有益な効果の追求をあきらめた精神の後退を含んでいる」(p.110) ことを示している。「過去をイマージュの形で喚起するためには，現在の行動を差し控えることができなくてはならない…中略…あたかも，後ろ向きの記憶力に他のもっと自然な記憶力が逆らうかのようであり，この自然な記憶力の前向きの運動が，行動へ，生活へと我々を促す」(pp.87-88)のである。

4.『物質と記憶』第3章の「純粋記憶」論

i）我々の生は，「行動への傾向」と「夢想への傾向」という，互いに対立する二つの傾向から成り立っている (p.181)。前者は感覚－運動系を緊張させることで，その間の「隙間」(＝「亀裂fissure」p.103) を閉じ，記憶の現実化を妨げようとする。後者はこの系を弛緩させることで，「隙間」を大きく開き，そこにできるだけ多くの記憶を現実化させる (ibid.)。後者が前者に完全に屈伏してしまうなら，我々は，「単に純粋な現在に生き，刺激に対してその延長である直接的反作用によって反応する」ような「衝動の人」となる。逆に，前者が後者に屈伏するなら，「そのこと自体が楽しくて過去に生きる人」のような「夢想の人」となろう (p.170)。そのどちらも極端な場合であり，日常我々は，この中間にあって，二つの傾向を和解させている。「相補的な二つの記憶力のそれぞれが他方へ己れを的確に挿入し合う，そこに『よく平衡のとれた』精神，つまり，生活に完全に適応した人々を認めることができる」(ibid.)。

しかし，ベルクソンにおいてこの「平衡」は，あらかじめ与えられているわけでは決してない。そもそも，記憶イマージュは，それが生まれるときから現在の知覚－行動の構成に携わってはいない。ベルクソンにおいて記憶イマージュは，脳の痕跡に還元されないだけでなく，現在の知覚イマージュが構成された後に構成されることさえない。それは，どの意味でも現在の意識に依存しない。この二つのイマージュは，同時に作られる。「我々は，記憶の形成がけっして知覚の形成より後ではなく，それと同時である，と考える。知覚が作られるにつれて，そ

の記憶がそれと並んで，ちょうど物体の影のように描かれる。しかし普通の場合意識はそれを知覚しない」(E.S.,p.130)。

この無意識的記憶は確かに構成されるものだが，意識主体が能動的に総合するのでなく，先述の，総合の第二の段階に位置する，と言えよう。それは，現在の知覚－行動の地平とは本性上異なる，過去一般という地平を構成する受動的総合である。この過去の地平は，現在の地平に依存せずに独立した生を営む。我々は現在に生き，外的対象を知覚し，行動する一方で，己れの過去の観想にふけることができる。後者は固有に精神的な実在性のレベルであり，そこには，持続の緊張度の諸段階，あるいは「精神生活の無数の反復」(M.M.,p.181) がある。ここでは我々は，行動への傾向と夢想への傾向との二つに引き裂かれているように見える。人間において，「不確定性の地帯」や「隙間」が広がることで，作用と反作用とが分離されたのと同じように，現在と過去とが決定的に分離してしまう。

分離された現在と過去とを結びつけるには，それぞれを構成する受動的総合をさらに統合するような，一段階高い受動総合が必要になる。諸感覚と諸行動の分散を統合するために「感官の教育」を要したように，この段階でも訓育が必要になる。逆にいえば，それ以前には統合はない。ここでもベルクソンは，子供を例にとる。

「たいていの子供に，自発的な記憶が異常に発達しているのは，まさしく彼らがまだその記憶力を行動と連携させていないところからくる。彼らはその場その場の印象を追うのが常であって，彼らにあっては行動は記憶の指示に従わないから，逆に彼らの記憶は行動の必要に制約されない。…中略…知能が発達するにつれて，一見記憶力が減退するのは，それゆえ，記憶と行動との有機化が増大するところからくる」(pp.170-171)。

ii）さて，ベルクソンにおいて精神は，物質に劣らず広大な領域を成している。精神は，異なる無数のリズムで奏せられる。記憶の独立的イマージュが知覚へ投射されるだけではない。「或る決意をせなばならない場合，その人は，彼の経験の全体を，いわゆる彼の性格のうちに集め有機化しつつ，行動へ集中させるであろう」(p.192)。この平面では，過去は現在に極度に統合されている。別の極限

では我々は，現在から遊離して過去の観想にふけるが，その場合，己れの過去をちょうど映画を見るようにたどり，物語のように構成するかもしれない。この過去の構成には，緊張から弛緩まで諸段階があるが，とにかくそれらは過去のイマージュ相互の有機化である。ベルクソンは『精神のエネルギー』において，この諸段階を垂直に重なる諸平面にたとえながら，次のように述べている。

「私は今，自分のかつての長い旅行のことを考えている。その旅行中のいくつかの出来事が，何かしらの順序で私の心に戻り，機械的に出来事が出来事を呼び起こしている。しかし，その旅行中の或る期間を思い出すように努力すると，私はその期間の全体からそれを構成する部分に移るのであって，先ずその全体は私には，或る情感の色調を伴った不可分の全体として現れる」(E.S.,p.167)。

このような統一ある各平面は，既に有機化の所産である。これは，既に『試論』において，過去が不可分な全体として固有のニュアンスを帯びつつ意識に現れることとして，「純粋持続」として，記述されていたものであるが（D.I.,pp.121-122)，『物質と記憶』では，この「純粋持続」は所与ではなく，過去を構成する受動総合の産物であり，ベルクソンはその総合を次のようなメカニズムとして分析している。

「一方で，感覚－運動的状態Ｓは，記憶力に方向を与えるわけで，つまりは記憶力の現実的で活動的な極限に過ぎない。また他方，この記憶力自身は我々の過去の全体とともに突進を敢行することによって，それ自身の可能な最大部分を現在の行動に組み入れる。この二重の努力から，記憶力の無数の可能的状態が時々刻々生じてくる。これが我々の図形の断面Ａ’Ｂ’，Ａ”Ｂ”等によって表される状態である。これらは皆，既に述べたように，我々の過去の生活全体の反復である」(M.M.,pp.187-188)。

しかし，現在の知覚的世界と似て，記憶イマージュも，既に相互に有機化され脈絡を持った姿で意識に現れることから，我々は過去の表象を，現在のそれと等しい仕方で扱おうとする。ベルクソンによると，連合主義心理学は，この誤りをおかしている。「連合説は，個々の記憶イマージュを我々の精神生活の中にそのまま与えられている既成の事物にしてしまうので，これらの対象の間に不可思議な引力を想定せざるをえない」(p.183)。連合説は，過去の表象の連鎖を説明す

るために連合を持ち出すが，この説明は，知覚を対象に切り別けてその間に操作可能な関係を設定する知性の能動的総合が，過去にも同じことをしたものにすぎない。「本当は，この互いに依存しないイマージュは，精神の工作に待つ後からの産物である」(ibid.)。ベルクソンの考えでは，記憶イマージュ相互間の有機化は，上のメカニズムによって生じるのであり，我々は，本性上現在の判明かつ独立した空間的表象を作り出す能動的総合の彼方に，過去の表象を作り出す受動的総合の諸段階を認めざるを得ない。もっと言うならば，現在の生に役立つという観点から都合の良いように有機化される以前に，過去そのものの断片が即自的に保存されていることを，認めざるを得ない。この即自的過去を，ベルクソンは「純粋記憶souvenir pur」と呼ぶ。「純粋知覚」が根源においては互いに分散したままであるように，「純粋記憶」も有機化以前にそれ自身としてあるが，我々はこれを，「精神の工作」による「互いに依存しないイマージュ」と混同すべきではない。

5．知覚と記憶の平行的脱中心化

さて，我々は『物質と記憶』を概観し，日常的な客観的世界以前にある有機的に意味づけられた「生きられる世界」はその現在の地平でも過去の地平でも究極の所与ではないことを，見た。ベルクソンは，どの地平においても，脱中心化された次元に溯行する。

それでは，彼は，そのような脱中心化された次元についての具体的経験を我々に提示しているだろうか？その例を，我々は『精神のエネルギー』に見出すことができる。そこに収められた講演記録『夢』でベルクソンは，次のように語っている。すなわち，睡眠中の夢の中でも，知覚されるもの（あるいは身体内外からの刺激）に対する記憶の解釈作用はなくなるわけではない。しかし，この解釈作用は，身体の感覚－運動系の緊張が弛緩しているために流動的で，一見無秩序に働いてしまう。

「例えば，白い点のある緑色の斑点が視覚に浮かぶとします。それは芝生と花の記憶，玉突き台と玉の記憶その他たくさんの記憶を物質化することができるでしょう。すべての記憶が感覚においてよみがえりたいので，すべての記憶が感覚

を追います。時にはいくつもの記憶が次々に感覚にたどり着くことがあります。そこで芝生が玉突き台になると，我々は異常な変化を見ることになります。時にはいくつもの記憶が一緒に感覚にたどり着くこともあります。そうすると，芝生が玉突き台であることになり－たぶん夢見る人は不合理を推理によって取り除き，それがなおさら不合理を大きくします」(E.S.,p.105)。

我々は夢の中でこのような体験を毎日くり返している。さて，既に述べたように，我々が覚醒し行動している日常的な次元を成り立たせている総合の三つの段階があった。上の例からわかるように，夢は，この三つのうち，能動的総合（総合の第三の段階）を持たない。のみならず，第二の段階において統合の諸段階を成す受動的総合が，解体されている。つまり，日常的な世界と異なって，「調整の正確さ」(p.104) がない。例えば，日常的世界では，花は花として，排他的・恒常的に捕らえられるが，それ以前の次元である夢においては，質料（感覚）と形相（記憶）の排他的・恒常的な一対一対応がなくなり，同じ質料が複数の形相を受け入れたり，あの形相からこの形相へ絶えず移ったりする。あるいは，質料一般と形相一般が遊離して，形相だけが乱舞することもあろう。ベルクソンはそのような乱舞を次のように述べている。

「目覚めているときには，視覚の解釈に役立つ視覚的な記憶が，正確に視覚に重ならなければなりません。だから記憶は感覚の展開に従うわけで，同じ時間がかかります。…中略…しかし夢の中では，視覚を解釈する記憶が自由を取り戻します。視覚は流動して，記憶はそれに固着しません。…中略…そこでイメージは望むなら目のまわるような速さで進んでいくことができます」(p.106)。

その一方で，資料も，形相の支配から逃れて脱分節化し，裸形の流れとして知覚されてしまうのではないか。我々は既に，『物質と記憶』において，未知の国語を聞くときの例を見た。その場合，始め我々は「どの音も互いに似通っている混乱した雑音を知覚するだけ」だったが，これは，感覚が運動と関連づけられておらず，その結果，記憶の正確な投射が不可能だったからに他ならない。

しかし，ここで，夢は単に異常で病理的な状態に過ぎないのではないか，と問うてみよう。この問いは，次のような厳密な意味で理解されなくてはならない。

“確かに，夢においては日常的な次元とは異なるあり方が我々において生じる

だろう。しかし，それは，日常的な次元を成り立たせているメカニズムが不調になったこと示すだけで，日常的な次元よりも以前の次元のあり方を指し示すわけではないのではないか？なぜなら，我々が『以前』というタームを使うときのそれは，＜『以後』の次元の土台ないし成立条件として既に機能している＞という，重い意味を与えているからだ。”

だが，この異議申し立てを我々は，はっきりと斥けることができる。なぜなら，夢のように，日常的次元を成り立たせるメカニズムが不調な状態の例として，ベルクソンは『物質と記憶』において様々な精神疾患や病的状態を挙げているが，『精神のエネルギー』ではそれに加えて，次のような注目すべき記述をしているからだ。

「この考えを受け入れれば，特殊な病的状態や異常現象を生み出す積極的な原因を求める理由がなくなる。なぜなら，そういう現象には，何も積極的なものがなく，何も新しいものがないからだ。そういう現象は正常なときにも既に作られていたが，生活への注意を確保する反対のメカニズムが絶えず働いているため，そういう現象が現れようとすると，そのメカニズムの一つによって妨げられていたのである」(p.126)。

したがって，夢の体験は，知性的な能動的総合の土台をなす次元を指し示す。日常的な世界から見ると異常であるような世界は，日常的な世界を構成するメカニズムがその上に押しかぶさるような，或る機構によって既に絶えず構成されている。能動的総合以前にある，そのような受動的総合は，非排他的・非恒常的に総合する。脱中心化された世界は，それによって可能となる。

おわりに

我々は，『物質と記憶』の理論を概観し，実在性の諸段階の区別をそこに見出した。そして，その区別に，メルロ・ポンティの『知覚の現象学』を越える射程をごく一般的な形で求めた。しかし，この著作の細部には，それだけ取り上げて具体的に分析すべき発想が，豊富に散りばめられている。特に，その第3章における記憶の理論の多くを取り上げることがここではできなかった。それは今後の課題としたい。

注

引用の頁数は，ベルクソンからは，全てP.U.F.版に従い，『意識の直接与件に関する試論』・『物質と記憶』・『精神のエネルギー』をそれぞれ，D.I.,M.M.,E.S.と略記した。メルロ・ポンティからは，Gallimard版の『知覚の現象学』を，P.P.と略記した。

(1) Georges Mourélos;Bergson et les niveaux de réalité, 1964,P.U.F.

(2) Pierre Trotignon;L'idée de vie chez Bergson et la critique de la métaphysique, 1968, P.U.F.,p.183

(3) 拙稿，「『意識の直接与件に関する試論』における持続と空間」名古屋大学哲学論集第2号，1992, pp. 25－40

(4) J.P.Sartre;L'Etre et le Néant, 1943, nrf, Gallimard, pp.634-635

(5) Bergson;L'évolution créatrice, P.U.F.Chap. I,sec.9 Gilles Deleuze; Cinéma 1,p.87

(6) 『物質と記憶』において，「拡がり」は，「空間espace」と非延長との中間に位置してこの二つの分裂を乗り越えるものとして措定される根源的空間性である（M.M.,p.278)。ベルクソンは，これを時間的収縮の度合と反比例するものとして捕らえる。すなわち，記憶によって諸瞬間が収縮されるほど「拡がり」の度は，それだけ減少する。時間的収縮の度の増大は，また，知覚されるものが知覚対象の位置する場所においてでなく，我々のうちで知覚されるようになる度合の増大でもある。彼は，感覚が事実上は我々のうちで知覚されるのは，記憶がそこに多数投入されているからだと説明する（p.31, 68)。

(7) ミケル・デュフレンヌ『人間の復権を求めて』山縣熙訳　法政大学出版局 p. 9

（かわつ　くにき　哲学）